

坂井信三『異なる者の出会いと共存——西アフリカ・ムスリムの人類学的聖者伝』

■出版地：横浜 ■出版社：春風社 ■出版年：2024年 ■総頁数：352頁 ■定価：5,000円＋税

中尾 世治*

本書は、西アフリカ、ニジェール川中流域（現在のマリ中部）の19世紀から20世紀初頭にかけて、共同体を危機に陥らせる大きな流れに巻き込まれながら、異なる者といかに共存するべきかという社会倫理的な課題を引き受け、それゆえに例外者として厳しく生き、聖者とされた3人のムスリム知識人の生涯と思想を論じた著作である。

こうした内容に基づいて、本書は、3人の聖者1人ずつに各部が割り当てられた三部構成となっている。各部では、それぞれの聖者が生きていた時代背景と地域の状況が述べられ、分析の対象となる口頭伝承と文字資料のそれぞれ異なる残存状況とそれらの読解のアプローチがまとめられ、対象となった聖者の生涯と思想が検討されている。目次は以下の通りである。

序 章 「異なる者の出会いと共存」

第一部 ジャのアルファ・ボアリ・カラペント：嘆願する聖者

- 第1章 背景
- 第2章 伝承
- 第3章 嘆願する聖者

第二部 シンサニのカラモコ・ウスマン・ソソ：「戦争の家」のムスリム知識人

- 第1章 マルカ・ムスリムの文書研究の課題
- 第2章 状況
- 第3章 文書
- 第4章 マルカ・ムスリムの自己像

第三部 バンジャガラ・チェルノ・ボカール・サーリフ・タル：「唯一以外であり得ない神」

- 第1章 植民地支配とチェルノ・ボカールの生涯
- 第2章 資料
- 第3章 チェルノ・ボカールの宗教思想

終 章 対立を担う「聖者」たち

序章では、本書の問題意識と全体像が説明される。まず、19世紀から20世紀初頭のニジェール川中流域のムスリムが、イスラームの「北」から「南」への文明の流れにどう対峙したのかという問いが提示される。この流れのなかでは、「白人」から「黒人」への伝播、すなわち、サハラ南縁のアラビア語で「ピーダーン」（白人）と「スーダーン」（黒人）と呼ばれる「人種」的な非対称性が前提となっていた。この非対称性は、政治経済的には奴隷制、宗教的には一神教の優越、知識の伝達においては文字の優位性という点で現れたとされる。さらに、ニジェール川中流域の「黒人」ムスリムは、北方の「白人」に対する異質性を持ちながらも、内部の在来宗教との関係においても異質な存在であった。

他方で、この地域では異なる民族間の水平的な補完関係が「差異と交換のシステム」として機能し、そのシステムにムスリムも組み込まれていた。この補完関係が、北と南の非対称的な関係と重なり合い、「異なる者の出会いと共存」を生み出した。こうした社会的背景のなかで、本書は3人の聖者の生涯と思想に焦点を当て、彼らがどのように「よきムスリム」としての生き方を示したかを論じるとする。また、これらの聖

* 京都大学大学院

者についての口頭伝承と文字資料の関係性を通じて、この地域の知のあり方も分析の対象とすることが述べられている。

第一部では、ニジェール川中流域の古いムスリムの町として知られているジャで19世紀に活動したアルファ・ボアリ・カラベンタ（1872年没）がとりあげられる。ジャの社会構造は、ボゾとマルカの厳しい通婚忌避や冗談関係による儀礼的同盟によって構成され、さらに非ムスリムの在来知を担うボゾとムスリムのイスラームの知を担うマルカというかたちでの知の配分がなされていた。さらに、17世紀になると、外来の戦士集団で非ムスリムのジャワラがジャの王となる。そして、ジャワラは、大モスクのイマームを世襲するカンタというムスリムのマルカの一族をはじめとするムスリムの学者リネジとの間にパトロン＝クライアント関係を築き上げるようになり、非ムスリムの王権とムスリム学者の補完関係が形成された。

そのような補完関係を揺るがしたのが、19世紀に起きたシェイク・アマドゥ（シェイク・アフマドゥ・ブン・ムハンマド・ロッポ）によるジハードであった。シェイク・アマドゥは、セネガルのフータ・トロからニジェール川中流域のマーシナに移住したフルベのウラマー（学者）の一族に生まれ、フルベの人びとを率いてマーシナで在来の諸民族に対してジハードをおこしていた。そして、このフルベのジハード勢力は、異教徒と併存しているジャに外圧をかけることになる。この外圧に対して、カラベンタは伝統的な政治権威と宗教権威を排除することで、ジハード勢力によるジャへの直接的な介入を回避させた。しかし、その過程で、伝統的な学者の一族からの理解を得たとはいえ、カラベンタは伝統的な学者の一族をジャから追放している。カラベンタの謙虚さを伝える伝承として、いつも壁をこするように歩いていたために衣服の袖がボロボロであったという逸話がある。この点について著者は、友人を裏切った者が「人殺しのように嫌われる」という地域の慣習を引きつつ、追放をおこなったカラベンタが自分自身を「人殺し」のようにみなさざるを得なかったと推量している。そして、カラベンタは、疫病を食い止めるために亡くなったという、彼の晩年についてのわずかな口頭伝承を引いて、第一部は閉じられる。

他方、第一部では、口頭伝承と文字資料の相互作用が論じられている。まず、カラベンタの幼少期の口頭伝承がとりあげられる。この口頭伝承は、勤勉で無欲

の少年であったカラベンタが働いて家に戻ると、彼の空の器に御馳走が奇跡として突然現れるというものである。これと同型の逸話が、『探求者の年代記』での他の学者の幼少期の奇跡譚にあらわれ、『探求者の年代記』の語りが口頭伝承に与えた影響を示唆している。

また、近年の研究では、17世紀に書かれた年代記が、19世紀にシェイク・アマドゥの権威を強化するために『探求者の年代記』として改竄されたことが指摘されている。本書では、それを踏まえて、ジャが「神の町」として王の立ち入りを拒む権利があったという記述が削除され、かつてボゾが他の特定の民族とともに奴隷とされたという記述が追記されていることを指摘している。さらに、ボゾを含む民族を奴隷化する文書がシェイク・アマドゥから発せられていた。カラベンタについての口頭伝承では、カラベンタがシェイク・アマドゥに対して、ボゾが奴隷であるのかを問いただして、奴隷ではない旨を確定させる逸話が残されている。このボゾらを奴隷化する文書が発せられていたことを踏まえると、住民の反発によって、シェイク・アマドゥがボゾの奴隷化を撤回させたと理解できることが指摘されている。

ここでは、口頭伝承と文字資料が相互に参照されており、それらを相互に検討することで、それぞれが個別に明らかにしうること以上のものが示されている。アラビア語の文字資料を扱った研究では、ニジェール川中流域の在来のムスリムがいかにジハードに対峙したのかはほとんど論じられていない。文字資料がほとんど言及していないからである。しかし、在来のムスリムによるジハードへの同意は大きな意味をもっていた。本書では、シェイク・アマドゥが建国したディーナの首都には、彼の墓と、彼の主たるイデオログであった学者の墓、そして、アルファ・ボアリ・カラベンタの墓があることを伝えている。ジャでは、この墓の真正性は認められていないが、シェイク・アマドゥと並ぶ権威として、カラベンタが認められていたことを示しているという。つまり、シェイク・アマドゥは、在来のムスリムの権威であるカラベンタに配慮せざるを得なかったのである。

第二部では、ジャから南に下ったニジェール川中流河谷に位置する、マルカの町のシンサニが舞台となる。シンサニの起源は15世紀半ばとされ、口頭伝承によれば、マルカのムスリム商人が非ムスリムの首長から土地を購入し、町を創設したとされる。一般的には、西アフリカでは土地は精霊に属するとされ、最初に特

定の土地に到着した者が土地の用益権を精霊との契約によって得たり、あるいは後続する者は、この先着者と儀礼的な同盟関係を結んで用益権を得る。このことを踏まえると、シンサニの土地を買い取ったという伝承は、極めて例外的であった。この口頭伝承は、のちにとりあげられる文書の読解の伏線となっている。

18世紀初頭に、ニジェール川中流河谷では、非ムスリムによる王権のセグー王国（バンバラ王国）が成立し、シンサニに住むマルカのムスリム商人たちは、異教徒のセグー王国と協調して、その影響下で商業を発展させていった。しかし、権勢を誇ったセグー王国も、1861年にアル・ハジ・オマル（アル＝ハーッジ・ウマル・サイード・フーティー・タル）のジハード勢力によって滅ぼされる。アル・ハジ・オマルは、セネガルのフータ・トロの出身で、フルベのウラマーの一族に生まれ、マッカ巡礼の際に、ティジャーニーヤの開祖アフマドゥ・ティジャーニーの高弟ムハンマド・アル＝ガーリーから教えを受け、スーダーンにおけるハリーフア（開祖の代理人）の地位を得たのち、セネガル川流域からニジェール川中流域においてジハードをおこした。セネガル川流域からニジェール川中流域にやってきた（フタンケと呼ばれる）アル・ハジ・オマルに従う人びとは、中流河谷の住民に厳しい税を課し、略奪をしたため、この土地の非ムスリムである民族のバンバラが反乱をおこす。この反乱に援軍を送ったのが、より北のサヘル地域で権勢を誇ったムスリムのクンタの一族である。クンタはフタンケと敵対しており、バンバラの傭兵を雇い、反乱を支援する。そのなかで、シンサニはフタンケの軍に包囲されるが、クンタらの攻勢により、最終的な征服を免れた。

第二部の主人公となるウスマン・ソソ（1876年没）は、こうした激動の時代の19世紀半ばに活躍したシンサニのムスリムの代表的な学者であった。ここで中心的に分析されるのは、ウスマン・ソソの書いた2つのアラビア語の文書である。

1つ目は、アル・ハジ・オマルのジハード以前の1850年代に書かれ、シンサニに逗留していたモール人（アラビア語を母語とするマグリブ出身者）のイスラーム学者が大モスクでおこなわれた金曜の集団礼拝を中座したことについての、このモール人の学者とウスマンとの往復書簡である。この文書では、シンサニでの金曜礼拝がイスラーム法上、無効であるとするモール人の主張に対して、ウスマンは、シンサニが、セグー王国という異教徒の「戦争の家」——ムスリム

の君主の支配下にある「イスラームの家」の外にある領域——にとりかこまれているものの、長らくイスラームの信仰を維持してきたということを、土地を買い取ったというシンサニの起源についての口頭伝承をもとに反論する。さらに、ウスマンは「白人」ムスリムの優越的態度を批判し、「人種」による宗教的優位性を否定している。

2つ目の文書は、ジハード以後に書かれたものである。シンサニは町を包囲していたフタンケをバンバラの反乱とクンタの援護によって一旦は退けたのちに、クンタが撤退してしまったことで、今度は非ムスリムのバンバラの脅威にさらされた。その際、町の一部の有力者が、クンタに支援を求め、バンバラへのジハードを実行するべきだと主張した。この主張に対して、ウスマンが、法学者として出したファトワー（法的見解）が、この文書である。

このファトワーでは、バンバラとの「講和」の法的正当性と、ジハードの不当性について論じられている。まず、マーリク学派の代表的な学者の著作と西アフリカの有力な学者の文書を引用しつつ、バンバラへの戦争は、むしろ、イスラームへの害悪をなすと結論づける。さらに、このシンサニの状況を、預言者ムハンマドが啓示を受けたのちに、「異質なもの」（*gharīb*）として迫害にあった状況を重ねる。このように「初期の頃の教友や今日のシンサニの住民のように、不信仰者と戦うことのできない弱者」には、ジハードの諸条件がそろっていないがゆえに、ジハードは「禁止される」と結論づけられる。

第一部では口頭伝承を中心に文字資料との関係が論じられたが、第二部では文字資料を中心として、文字資料と口頭伝承との関係が論じられている。第一の文書では、ウスマンがシンサニの起源に関する口頭伝承をイスラーム法の論理と結びつけ、ムーア人への批判を展開しており、第二の文書については、シンサニの現状認識を支える口頭伝承の世界——異教徒であるバンバラとの共存——を、預言者ムハンマドの迫害の状況と現状を重ね合わせるという、イスラームの歴史の独自の解釈から説明している。シンサニは、土地の主との儀礼的な同盟関係といった慣習的な基盤を欠き、土地を買い取ったのちに、異教徒の君主と関係を構築しなければならなかった。こうした「戦争の家」にとりかこまれた状況を初期の教友と重ね合わせ、マーリク学派の基本的な論理と西アフリカのイスラーム学者の言説から反ジハード論としてつくりあげられたもの

が、第二の文書であるといえるだろう。

第三部では、20世紀初頭のフランスの植民地統治下のバンジャガラが舞台となる。バンジャガラは、ニジェール川内陸デルタの東に位置し、シェイク・アマドゥによって建国されたディーナを征服したアル・ハジ・オマルが拠点をおいたことで、都市として発展してきた。その後、19世紀末のフランス軍の征服によって、政治的な重要性は減衰していったものの、農耕・牧畜によって経済的には発展するようになる。バンジャガラの町を含むバンジャガラ断崖地方は、もともとは非ムスリムのドゴンという民族の居住域であり、そのために宣教師が入植し、またグリオールなどのフランスの民族学者たちの調査もなされるようになる。シェイク・アマドゥ、アル・ハジ・オマルのそれぞれのジハードに連なって移住してきた、フルベ、トゥクロールという民族もまた、バンジャガラの町に定着していた。植民地状況下のバンジャガラは、こうした多様な人びとの居住する町として発展したのである。

第三部の対象となる聖者は、チェルノ・ボカール(1940年没)である。チェルノ・ボカールは、アル・ハジ・オマルのジハード勢力の中核にあった家柄の出身で、父方、母方ともに、政治的・宗教的にきわめて権威の高い出自であった。他方で、彼はフタンケの学者たちからだけでなく、ニジェール川中流域の学者からも学んでおり、ジャのアルファ・ボアリ・カラベンタの最晩年の弟子であるニョロ・カラモゴからも教えを受けている。その出自にもかかわらず、チェルノ・ボカールは、植民地統治下で政治的・宗教的に地位を固めていくフタンケの親族とは一貫して距離を保ち、ニジェール川中流域の古いイスラームの伝統を受容し、社会的に周辺的な立場におかれていたボゾやダフィンなどの民族や鍛冶屋などの職能集団と親しい関係を結んでいた。さらに晩年、チェルノ・ボカールは、植民地行政から厳しい監視を受けていたハマウィーヤというスーフィー教団に帰属することになり、そのために、迫害を受けながら、亡くなることになった。

チェルノ・ボカールの生涯と思想については、彼から教えを受けつつ、植民地学校に通い、通訳として行政で勤務し、のちに民族誌家・作家となったアマドゥ・ハンパテ・バ(1991年没)によって書き残されている。その著作はフランス語で出版され、英訳もされるなど、世界的に広く知られるようになった一方で、チェルノ・ボカールについての資料は、ハンパテ・バの著作と彼のメモ書きのみとなっている点が特徴的

である。

第一部・第二部で扱われた文字資料は、アラビア語で書かれていたが、ここでは、ハンパテ・バによってフランス語で書かれているという点で、それまでの文字資料とは大きく異なっている。この点について著者は、チェルノ・ボカールを対象とした先行研究と同様に、ハンパテ・バ自身の思想的な変遷を踏まえつつ、参照可能なハンパテ・バによるテキストを相互に比較することで、チェルノ・ボカールの思想に迫りうると主張している。

著者は断定的な表現を避けているが、著者による長い論述(pp. 249–261)を踏まえると、チェルノ・ボカールの思想の特色は、西アフリカの非ムスリムの在来の知とイスラームの知との融合、ないしはイスラームの知による在来の知の包摂にあるといえるだろう。チェルノ・ボカールは、イスラーム神秘主義思想に内在している、文字に数を含む他の意味を読み解く、文字学(本書では「文字の学問(ilm al-ḥurūf)」)に大きく傾倒し、こうした数の象徴的な意味を組み合わせ、読み書きのできないムスリムへの教授をおこなっていた。こうした教授法は——チェルノ・ボカールとの直接的なつながりはわかっていないものの——カッベと呼ばれ、さまざまな地域のフルベによって実践されたものと重なりあっている。さらに、このような教授法は、非ムスリムのフルベやドゴンなどの民族のイニシエーションで用いられる数のシンボリズムと類似したものとなっている。

また、チェルノ・ボカールは、タウヒード(アッラーの唯一性)の思想などを日常の卑近な出来事や事物のなかに読みとって語っていた。小動物や草花への観想、日々の人びととの会話、そうしたものから「類似の法則」を働かせ、具体的なものから、抽象的なイスラームの概念を説明している。そして、こうした「類似の法則」の思考もまた、文字学におけるシンボリズムと同様に、非ムスリムの在来の知にみられるものであった。

そのような知のあり方だけでなく、チェルノ・ボカールの思想の核には、「愛と慈悲」という概念がある。それは、イスラームを基盤としつつも、「一切の根源である唯一の神へのいわば垂直的な『愛』と生活の中で出会う『人』に向かって水平に広がる『慈悲』という、普遍化された倫理指針(p. 321)とされる。つまり、宗教の教義を超えて、普遍で唯一なるものへの統合としての「愛」と個別具体的な「人」に対する「慈

悲」において、異教徒のフランス人や在来の方の非ムスリムとの共存が目指されていると言い換えられるだろう。

第三部は、これまでの口頭伝承と文字資料との関係とは異なっている。分析の対象となったハンパテ・バのテキストは、いわば「書かれた口頭伝承」(pp. 231-234, 300)として位置づけなおされ、分析されている。それは、西洋の近代的な小説と学問を学び、吸収していたハンパテ・バが、それらの技法や方法を、意識的か無意識的か、取捨選択しつつ、口頭の知をフランス語によって再演しようとするものであった。この著者の立場をさらに敷衍させれば、ハンパテ・バは、アラビア語によるイスラームの知の表現とは異なる形式での、新たな時代の思想の表現を模索していたといえるだろう。

これらの三者の聖者の生涯と思想を論じたのちに、終章では、まとめと考察がなされている。まず、それぞれの部での口頭伝承と文字資料の関係が整理され、両者を双方に捉える歴史研究の可能性が指摘されている。そのうえで、ニジェール川中流域のムスリムは文字使用に遅れをとったというよりも、文字と口頭伝承とのあいだに、優劣関係ではなく、「ある種の緊張関係を認め、非文字的な伝承知に文字知識とは別種の積極的な価値を見出していたのではないか」という見方を示している (pp. 302-303)。

また終章では、全体を貫く主題である「異なる者の共存」という社会道徳の点から、3人の聖者の思想についても検討されている。そこでは、ニジェール川中流域に伝統的にみられる冗談関係による社会道徳を基盤としつつ、3人の聖者が、それとは異なるかたちの社会道徳を示しているものとして捉え直されている。冗談関係においては、社会の役割を体現するものとしての「人物」(personage)が前提とされているが、3人の聖者は、それぞれの時代状況のなかで、自律した「人」(persona)として振る舞い、異他的な存在として、非業の死をとげている。これらを著者は、ジラルルの暴力論によってまとめている。

最後に、著者は、他者性と自己という点で、チェルノ・ボカールの思想を、「ユダヤ・キリスト教の伝統を引く現代西欧の自己—他者論」のなかに位置づけようとしている (p. 326)。具体的には、「大文字の『他者』(Autrui)」を想定するレヴィナスの他者論と対比させ、「『唯一以外であり得ない』神の『愛』が、日々の生活の場において、『他人(ひと)』(autrui)への『慈悲』

として溢れ出てくる」という点を述べ、個別化された他者概念と、絶対化された唯一の神の観念の一对の観念連合の意義を論じている。そして、「われわれに他者を『他人(ひと)』(autrui)として遇し、自己を『人』(persona)として貫く倫理的責任を問いかけてくる生きた存在」(p. 333)としての聖者の生成に着目することの重要性を説いている。

以上が、評者による本書のまとめである。しかし、さまざまな論点が随所に散りばめられており、上述の要約では十分に意義を述べられなかった論点も多い。リクルを援用したハビトゥスと語りの循環 (pp. 12-18)、聖者論ではない人類学的聖者伝という構想 (pp. 19-22)、終章におけるジラルルの暴力論とモースの人格論をかけあわせた倫理と聖者の関係性などといったアイディアも、個別に論じられるべきだろう。言い換えれば、本書は手堅くまとめたというよりは、自由に思考の可能性を探究した書であるといえる。

他方で、本書は、アフリカ史研究の文脈では、近年のホットトピックに一石を投じるものとなっている。本書でも触れられているが、トンブクトウの年代記の再読など、アラビア語の文書の丁寧な再読や新たな史料の「発見」を通じて、年代記を書くということの政治性を強調することで、同時代の社会・政治的な文脈がより克明に明らかにされ、これまでの西アフリカ史の想定が修正されつつある (e.g., Nobili 2020)。しかし、これらの研究が、アラビア語文書の重要性を強調するあまり、口頭伝承と文書の相互関係はまったく論じられず、文書をほとんど残さなかった集団との関係が過小評価される傾向にある。その意味で、特に第一部と第二部の内容は、近年の研究を踏まえつつも、それらの研究に、口頭伝承と文書の相互関係という点から新たな光をあてるという意味で独創性の高い研究となっている。

本著の長所でもあり、短所でもあるのは、必ずしも緻密に論理を組み立てるといったものとなっていないことだろう。たとえば、異質性は「人種」・民族間関係においても、単独性をもつ聖者に対しても用いられ、初期の教友の時代とも重ね合わせて理解もされている。これらの異質性は果たして、同一の概念としてまとめられるだろうか。この点については、終章の他者論における「大文字の『他者』」と「他人(ひと)」の区別との関連も明らかにして、差異と異質の論理関係として論じられるべきだろう。また、口頭伝承と文書の相互関係についても、評者による要約でふれたよう

に、事例ごとに性質や内容が異なっている。口頭伝承と文字資料の語りの構造の類似や引用関係、口承の知の文書化／文書の知の口承化、両者の知のカテゴリー区分などについて、口頭伝承をめぐる理論研究（e.g., Barber 2007）とも対照させて精緻化する必要がある。しかし、これらは、今後の研究で精緻化していく可能性として読むほうが生産的である。その意味では、本書は、著者による長年の集大成というよりは、今後の研究に開かれた著作である。西アフリカのイスラーム研究のみならず、アフリカ史研究を学ぶ者は、本書か

ら新たなアイデアを得ることができるだろう。

参考文献

Barber, Karin

2007 *The Anthropology of Texts, Persons and Publics*. Cambridge University Press.

Nobili, Mauro

2020 *Sultan, Caliph and the Renewer of the Faith: Ahmad Lobbo, the Tarikh al-Fattāsh and the Making of an Islamic State in West Africa*. Cambridge University Press.